

狡猾の人 森功

■収賄で懲役刑となった守屋武昌（防衛事務次官）を主人公にした話

懲役二年六月の実刑——。逮捕からおよそ一年後の〇八年十一月五日、東京地方裁判所で事件の一審判決が下された。

一審判決では、収賄罪に問われた賄賂を二つに大別している。一つは防衛事務次官在任中の〇三年八月から〇七年四月にかけ、次女の米国留学費用や長男のサラ金返済の肩代わりとして受け取ったとされる三六四万円の現金。それに、ゴルフ接待を受けたときの代金、八八六万円だ。ゴルフ接待は泊りがけで行った一二回分の三八九万円と一〇八回の日帰りゴルフ代金四九七万円である。

■パトリオット1機で1000億円もする。

■家庭では、過去の浮気を蒸し返され立場が弱い。そして、長男の非行。

めずらしくもない浮気話である。特定の愛人を困ったり、貢いだりしたわけでもない。しかし、これ以来、守屋は家庭内での立場がなくなる。ただでさえ、気の強い妻や娘に囲まれ、ますます頭があがらなくなっていった。

おまけに、最悪なことにこのことが子供たちにまで伝わっていく。夫人に叱責されている姿を目撃されていたようだ、と守屋自身が明かしたが、そうではなく、夫人が子供たちに話を聞かせた可能性もある。子供たちは成長し、多感な時期を迎えたあるとき、そろって父親に詰め寄った。

「あのおときお父さんは、お母さんに頭を下げてたよね。もう二度としませんから許してください、って……」

すでにくだんの海外出張から一〇年以上経っている。にもかかわらず、それを蒸し返され、やり込められたという。父親としては、情けない限りだ。とりわけ、この話題になったときの長男の視線は、ひどく冷たかった、と守屋は振り返った。

「責任はすべて私にありました。そもそもは私の浮気が、家庭不和の遠因になったのかもしれない。男の甲斐性などと笑い飛ばせたらいいが、そのことで母親びいきの子供たちは私に対する反抗心を抱いたに違いない。私の浮気について、ずっと覚えていたのには参った」

そう悔やんだ。妻に対してはいざ知らず、子供たちにまで馬鹿にされてしまったという。とりわけ問題だったのが、長男だろう。守屋がその非行にはじめて気付いたのは、長男が小学校六年生のときだという。すでにそこから守屋家の崩壊がはじまっていたのかもしれない。

■小池百合子防衛相のやり方

これはいわば事前調査で、国がこの事前調査に基づき、沖縄県に環境影響評価手続きという計画書を提出し、本格調査に入る。しかし、沖縄県知事の仲井眞弘多は、その環境影響評価手続きの計画書を受け取らない、と言い出す。強引な守屋のやり方が裏目に出た結果ともいえる。そうして、沖縄県が環境影響評価手続きの計画書を受け取る、受け取らない、と揉めていった。受け取れば沖縄県が日米間の合意に一歩歩み寄ることになる。そこには交換条件がつけられた。それが守屋の次官更迭案である。

守屋を辞めさせれば、沖縄県として計画書を受け取るという。

「小池さんはそこに相乗りしたのです。計画書を沖縄に受け取らせ、それを手土産として訪米し手柄にしようとした。これが私と小池さんの確執の真相です」

そう守屋自身は解説した。そんな単純なものかどうか定かではないが、実際、政界渡り鳥と呼ばれる小池の行動を見る限り、その程度にも思えてくる。

(略)

守屋との衝突において、小池百合子はマスコミ相手にパフォーマンスを演じている。新聞に次官人事をリークする前、守屋の携帯電話に連絡したが、つながらなかったからやむなく公表したと言った。次官たるもの緊急時に連絡がつかないとは何事かと憤ってみせたものである。だが、守屋が気付かないはずだ。着信記録は深夜十二時過ぎ。それもワン切りしていた。それで、気付けという方がどうかしている。